

日本近代化黎明期における 山頂からの眺望に関する考察 -志賀重昂『日本風景論』における記述に着目して-

谷水 錬¹・中井 祐²

¹正会員 株式会社イー・エー・ユー
(〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビルディング1F, E-mail:kitau@eau-a.co.jp)

²正会員 博士(工学) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

本稿では、風景の見方における近世・近代初期の比較、さらには近代化に関する理解の深化を目的として、志賀重昂『日本風景論』の記述、特に山頂からの眺望に関する記述について、近世後期の文献およびその主要な翻案元とされるE.サトウ『日本旅行案内』との比較を行った。『日本風景論』においては山頂からの眺望が精神を高揚させるとされるが、それは上記の他文献にみられない特徴であることを示した。

キーワード: 近代化, 眺望, 志賀重昂, 日本風景論, 日本旅行案内, 立山遊記, 立嶽登臨圖記

1. 研究の背景・目的・手法

(1) 近代化に関する既往の知見

日本の近代化について、近年では近世後期にはすでに文化・芸術等の面で後の近代化が準備・進行していたという見方が主流になりつつある。

例えば18世紀末には、1765年の錦絵と呼ばれる多色刷り版画の完成などにより、出版物の大量生産・多色刷りが可能となった。同時期には浮世絵において美人画と役者絵という伝統的な主題に風景画が加わり¹⁾、経済の成長や交通網の整備に伴い日帰りの行楽や遠隔地への旅行への関心が高まる中で、谷文晁『日本名山図会』(1812)などの名所図会が流行することとなり、庶民階級まで寺社詣でを理由とした旅が行われるようになった²⁾。錦絵は明治期まで主要なメディアとして機能し、日清戦争時には戦地の情報を伝えた³⁾。

他方、明治の近代黎明期においては、西田(2003)「自然景を賞賛する新しい近代的風景観が欧米からわが国にもたらされ、受容された」⁴⁾のように、風景の見方の変容も起きたとされているが、その中で、山の風景に関する同時期の著名な文献として志賀重昂『日本風景論』(1894)がある。これは地理学的記述、国威発揚、散文調の修辞に富んだ文体など様々な特徴を持つ文献だが、その中でも山頂からの眺望に関する記述は小島烏水ら後世の登山家に強く影響を与え⁵⁾、山に限って言えば、山頂からの眺望を新たにもたらしたとされる。

(2) 研究の目的・手法

しかし、特に近世後期から様々な人々が山に登ってきたわが国において、山頂からの眺望が近代に移入された全く新しいものだったということは考えにくい。

本研究では、近世後期と近代の風景の見方の共通点・相違点を知り、ひいては近代化の理解の深化のため、『日本風景論』における山頂からの眺望に関する記述の分析を通じて検討した。具体的には、『日本風景論』と近世後期の文献(十返舎一九『諸国名山往来』(1824)、金子盤蝸『立山遊記』(1844頃)、榊原守郁『立嶽登臨圖記』(1844))、さらに『日本風景論』の翻案元とされるE.サトウ『日本旅行案内』について検討した。

2. 各文献における記述の比較

(1) 『日本風景論』における記述

『日本風景論』では、最終第15版(1903刊行)の時点で、217座の山に関する記述があるが、そのうち山頂からの眺望に関しては56座で記述がみられる。

表-1 『日本風景論』における山頂からの眺望の記述の例⁶⁾

山	記述
男体山	山頂の眺望はなはだ荘宏
岩木山	岩木川の全溪谷を下瞰し眺望豁達

富士山	荘厳無比
白山	眼界真に荘宏
石鎚山	眼界の宏闊なる四国に冠たり
鍋冠山	眼界荘宏真に指顧に堪えず
普賢岳	眼界豁達にして山海を掌中に弄し
立山	世に「大」を説くもの多ししかれども真成なる自然の「大」は実に立山絶頂より四望するところにあり ⁷ 社前より四望せんか、東には越後の妙高、妙義、米山、下野の日光山臺、信濃の戸隠、飯綱、黒姫、浅間をみ、南には八ヶ岳、立科岳来り、富士山その背に高聳し、甲斐の白根、駒ヶ岳、信濃の駒ヶ岳、御岳、鐘ヶ岳、乗鞍、笠ヶ岳、飛騨の薬師岳を觀、南西には加賀の白山を眺め、西には加賀、越中の全平原を下瞰し、神通、常願寺の二川汪々としてその間に屈折し、北には日本海の浩渺を認む、その眺望や富士山頂につぐといえども、山岳を一時に夥多眺望するところは実にこれに過ぐ ⁸ 、自然の「大」を収悟せんと欲せばこの山に登臨すべし ⁹

さらに、「登山の氣風を興作すべし」と題された付録の序文において、志賀重昂は以下のように書いている。

楼に登りて下瞰す、なおかつ街上来往の人を藐視するの概あり、東京愛宕山に登りて四望す、なおかつ広遠の氣象胸中より勃発するを覺ゆ、なんぞいわんや嵯峨天に挿むの高山に登をや。(中略)その最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起こり、その下より平面世界の形成は君に向かいて長揖し来り、このごとくこれを掌上に弄し得、君ここにいたりて人間の物にあらず、宛然天上にあるがごとく、もしくは地球以外の惑星よりこの惑星を眺観するに似真個に胸宇を宏恢し、意気を高邁ならしめん、(中略)いわんや山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますます登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよますます快樂の度を加倍す。これを要するに、山は自然界のもっとも興味あるもの、もっとも豪健なるもの、もっとも高潔なるもの、もっとも神聖なるもの、登山の氣風興作せざるべからず、大いに興作せざるべからず。学校教員たるもの、学生生徒の間に登山の氣風を大いに興作することにつとめざるべからず、その学生生徒に作文の品題を課する多く登山の記事をもってせんことを要す。⁷⁾

これらを見ると、ここの山についての記述は、立山の「自然の「大」を収悟せんと欲せばこの山に登臨すべし」など一部を除くと簡潔に「壯觀」「跌宕」等と表現されているが、序文では非常に文量を伴って論述されている。特に注目すべきは山頂からの眺望によって精神を高揚させるという、「その最絶頂に登りて下瞰せば」に始まる前半部であり、最終的にはそのような効用をもって学校教育における登山の必要性を説いている。

(2) 近世後期の文献における記述

一方、山頂からの眺望について記述のある近世期の文献として、本研究では前述の通り十返舎一九『諸国名山往来』および金子盤蝸『立山遊記』を扱う。

まず『諸国名山往来』は、往来物に分類され、寺子屋の教科書として活用されたと考えられるが、山頂からの眺望については次の記述がある。

同州比叡山は桓武天皇の勅願延暦七年の草創なり。湖水の八景一望の内に在りて風粧被誉の景山なり⁸⁾



図-1 『諸国名山往来』における山頂からの眺望の記述⁸⁾

また、『立山遊記』『立嶽登臨圖記』は、近世期より多くの登山者があつた立山への、金沢藩士による登山の記録であり¹⁰⁾、ともに山頂からの眺望を記録している。



図-2 『立嶽登臨圖記』における山頂からの眺望¹⁰⁾

頂上ヨリ望メハ、東北ハ甲州ヨリ信州へ渡リテ高山雲上ニ聳へ、丑寅ニ當リ雲上ニ富士峰少し見ユル。初めハ其の形明らかならず。僧余に教えて曰ク富士山也ト。余ハ之を信ぜず。次第ニ霧散シ半腹ヲ露ワシテ初

めて富士峰ナル事ヲ信ス。遙か二見へ渡リテ其の殊勝言語に絶する事ナリ。又浅間嶽ハ東ヨリ北ノ方ニ當リ、近ク杖底ニ在リ、烟モ分明也。信州明光山（妙高山？）等ノ高山ヲ見ル。北ノ方劔ヶ峰（劔岳）高ク聳へ、西ハ地獄谷ヲ下シ見ル。室堂ハ子豆ノ掌上ニ在ルカ如シ。¹²⁾

これらは近世後期の文献において山頂からの眺望が記述されている例であるが、その表現については「風粧被誉の景山なり」（『諸国名山往来』）・「殊勝言語に絶する」（『立山遊記』）といった形で行われており、山頂からの眺望の価値をいかなる点においているか等については記述がみられない。

(3) 『日本旅行案内』における記述

かつて定説であった、志賀重昂が『日本風景論』を著すにあたり全国の山々を巡ったという見方は今日ではほぼ否定されているといつてよい¹³⁾が、その代わりに『日本風景論』の記述の基（翻案元）となったと考えられている文献の1つが、E・サトウ、A・G・S・ハウスによって編纂された『日本旅行案内』（1881、原題：A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan）である。これは、幕末期～明治期にかけて日本を訪れた外国人たちの手による紀行文・旅行案内の集成であり、記述の正確さ、記事がすべて実際の旅行者によるものであり、時刻・行程・天候・旅程等が正確に記入されているということが特徴として挙げられる¹⁴⁾。

『日本旅行案内』は非常に長い文献であり、様々な山について山頂からの眺望に関する記述があるが、例として立山の記述をみると、以下のようなものである¹⁵⁾。

天氣に恵まれれば山頂からの展望は実に素晴らしく日本一の眺めといえるだろう。はるか東を見るとずっと左に越後の妙高山、妙義山、米山、日光の男体山、そして信州の戸隠山と浅間山の噴煙などが見られる。南に転ずると、蓼科山の古峰を前にして八ヶ岳の連山が横たわる。その向こうには富士山のすっきりした円錐形と白根山と駒ヶ岳が目にはいる。さらに南には信州の駒ヶ岳と御岳も見える。飛騨方面には槍ヶ岳、乗鞍、笠岳、薬師岳が、そしてちょうど南西の方角には加賀と越中の平野が広がり、神通川と常願寺川の流れが越中の平野を潤している。北のほうには日本海が見える^a。¹⁶⁾

『日本風景論』の記述と比較すると、山頂から見える物の名称・順（点線a部）、立山からの眺望を富士山と比較して勝るとする点（点線b部）が共通し、翻案の事

実を確認できる。同様の傾向がほぼ全編で確認できた。

(4) 各文献の記述の比較

近世後期の文献と『日本旅行案内』の記述を比較すると、『諸国名山往来』にみられる眺望の秀麗さの記述に加えて、『立山遊記』および『日本旅行案内』においては地理学的に山頂から見える山々を記述する姿勢がみられる。これは『諸国名山往来』が主に庶民に向けたガイドブック的側面があるのに比べ、その他の文献は藩士あるいは日本を訪れた外国人たちによる記録としての側面を持つことが影響しているかもしれない。

また、前述のように『日本風景論』においては「登山の気風を興作すべし」序文において最も顕著に表れているような、山頂からの眺望を精神高揚と価値づける記述がみられた。立山に関する記述のうち、「自然の「大」」に関する部分（下線部ア・イ）も類するということができるだろう。一方で近世後期の『諸国名山往来』『立山遊記』、さらに『日本旅行案内』では、山頂から見える具体的な物などについては一致していながら、『日本風景論』におけるそのような記述に類する記述は確認できなかった。すなわち、当該記述は『日本風景論』の出版にあたり追加された部分であるといえ、『日本風景論』における「山頂からの眺望の新しさ」とは、正確には山頂からの眺望を精神高揚という価値と結びつける記述だったということができるとはできないか。

3. 考察・今後の課題

(1) 登山史における位置付け

我が国の登山の歴史における『日本風景論』の位置付けに関しては、山頂からの眺望を含む記述が小島烏水に代表される明治後期の個人登山家たちの登山を喚起し、日本山岳会の発足、ひいては日本近代登山の端緒を開いたとされる¹⁷⁾。その一方で、『日本風景論』の出版当時における批評では、大室（2003）も指摘しているように¹⁸⁾、登山についても言及が少なく、当時の慣習により『日本風景論』巻頭に掲載された書評のうち、初版批評では48篇中4篇、再版批評では9篇中1篇にとどまり、第3・4版については11篇のうち言及したものはなかった。さらに、これらのなかで山頂からの眺望について言及したものはみられなかった。

したがって、我が国の登山史においては『日本風景論』は近世以前から楽しまれていた山頂からの眺望を精神高揚と新たに価値づけたものの、それは一部の登山家を喚起したが、大多数の読者には受け入れられなかった、あるいは新鮮ではなかったといえる。すなわち、山に関して言えば、『日本風景論』が行ったのは「山頂からの

眺望の精神高揚という価値づけ」であり、小島烏水ら登山家を喚起し、日本山岳会結成の遠因ともなったものの、その他並行して行われていた調査・散策・観光・成人儀礼・信仰といった登山はあまりそれとは関係を持たずに行われていたといえるのではないか。

(2) 同時代における位置付け

一方で、書評のなかには『日本風景論』の詩歌を引用しながらの文章の美しさ、あるいは国粹主義的記述を歓迎するものが多い¹⁹⁾。その背景として同時代の概況をいくつかの分野についてみてみれば、例えば、学校登山が学術・心身鍛錬を目的として1889年以降行われるようになって²⁰⁾。また同時期には、1884年の音楽取調成績申告書において「音楽の教育的意義」として健康・道徳が挙げられ²¹⁾、学校などでの唱歌の推進、さらには俗学改良と呼ばれる動きがみられる²²⁾。さらに美術においても学制により図画教育が行われていたが、国民の持つべき「美術・工芸教育」（＝合理的・客観的に見る目）の養成を目的とした²³⁾。

さらに文学の分野では、仮名垣魯文が1875年のハムレット翻訳の失敗をふまえて日本風にアレンジした『葉武列士倭錦絵』の連載を開始（1886年）するなどの翻訳が広く行われていたほか²⁴⁾、明治期の大衆には近世由来の修辞体系を理解する教養・感性が残っており、彼らにとっては日常生活では用いない雅な言葉が自在に織り込まれた絢爛流麗な文章こそが文学であった²⁵⁾。

このように、言文一致とは相異なる古典的な散文で、西洋の文献を翻案しながら、山頂からの眺望の精神高揚という効用、さらに国威発揚について論じた『日本風景論』は、国民国家の創出が大きな目的とされる一方で、近世由来の修辞体系・感性が残っていた同時代の気運の表出した一例であると捉えられるのではないか。

(3) 今後の調査・研究の方針

今後の方針としては、本研究において行った比較を拡充させるべく、近世後期の文献の調査を充実させることが第一に挙げられる。本研究では、上述の文献に加え、十返舎一九『初登山手習方帖』（1796）などを参照したが、山頂からの眺望に関する記述はみられなかった。近世後期は前述の通り紀行文・案内本等が盛んに出版された時期であり、より幅広い文献の調査が必要である。

また、山頂からの眺望を精神高揚と結びつける論の由来についても、引き続き調査が必要である。『日本風景論』の大部分が翻案によって書かれているため、同種の記述が以前の文献にみられる可能性もあり、山に関する文献を中心に、国内外問わず調査が必要である。

参考文献

- 1) 浮世絵の歴史, 美術出版社, p. 124, 1998.
- 2) 「日本名山図会」と川村寿庵, 岩手県立博物館第60回企画展/岩手県立博物館編, p. 41, 2008.
- 3) 村島彩加: 幕末・明治期の日本における演劇写真の発展と変遷-歌舞伎役者を被写体としたものを中心に-, 演劇学論集, 日本演劇学会紀要, 52, pp. 63-71, 2011.
- 4) 西田正憲: 明治後期の風景画家アルフレッド・パーソンズと大下藤次郎による自然景の発見, ランドスケープ研究, 66, 5, pp. 393-396, 2003.
- 5) 大室幹雄: 日本風景論精読, 岩波書店, pp. 207-208, 2003. では、「日本の風景享受の歴史にあつて、火山を讚美したのは志賀が最初だったが、山裾から山容を仰ぎ見るとどまらず、山頂から火山湖を俯瞰した魅惑を語っているのは、読者にとって圧倒的な新しさであったらう」と述べられている。
- 6) いずれも志賀重昂: 新装版日本風景論, 講談社, 2014. より抜粋, 下線, 記号は筆者加筆
- 7) 志賀 (2014) 前掲載, pp. 208-209, 下線は引用者加筆
- 8) 十返舎一九: 諸国名山往来, 国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2536914>), 2019/09/05最終閲覧, p. 6裏, 1824, 引用者書き下し
- 9) 十返舎一九 (1824) 前掲載, pp. 6裏-7表.
- 10) 正橋剛二: 立山遊記・立嶽登臨圖記, 桂書房, p. 7, 1995.
- 11) 正橋 (1995) 前掲載, p. 35.
- 12) 正橋 (1995) 前掲載, p. 35, F図およびG図
- 13) 例えば, 三田博雄: 山の思想史, 岩波書店, 1973, p. 44. は, 志賀重昂の北海道農学校時代の手記等の分析を通じて、「志賀が北海道で足跡を印した範囲は、伝説とはまったく反対に、意外に狭い」と述べている。
- 14) 黒岩健: 登山の黎明, ベリかん社, pp. 135-136, 1979.
- 15) 記述はアーネスト・サトウ著, 床田元男訳: 明治日本旅行案内, 平凡社, 1996. に準拠する。
- 16) サトウ, 床田 (1996) 前掲載, 下巻, p. 60. 下線, 記号は筆者加筆
- 17) 例えば, 荒山正彦: 明治期における風景の受容-「日本風景論」と山岳会-, 人文地理, 41, 1989, pp. 64-75. は「志賀重昂著『日本風景論』の刊行によって新しい空間意識が作り出され、これを契機に近代的な登山が我が国に普及し、後に山岳会の設立をみるのである。(中略) これらの紀行文のもととなったそれぞれの登山行為は、『日本風景論』の一連の登山高揚に喚起されたものであり、(中略) 明治期の山岳会は、山頂からの雄大な眺めという風景を受容し」と述べている。
- 18) 大室幹雄: 日本風景論精読, 岩波書店, p. 55, 2003.
- 19) 例えば, 九州日日新聞1894年11月16日掲載の初版批評など.
- 20) 井村仁: わが国における野外教育の源流を探る, 野外教育研究, 10, 1, p. 88, 2006.
- 21) 渡辺裕: 歌う国民, 中央公論新社, p. 14, 2010.
- 22) 渡辺 (2010) 前掲載, p. 23.
- 23) 橋本泰幸: 視覚の再考, 美術教育学: 美術科教育学会誌, 2008, 29, p. 440, 2008.
- 24) 佐藤美希: 翻訳序文にみる明治の英文学翻訳, 通訳研究, 6, p. 53, 2006.
- 25) 北川扶生子: 明治期の修辞観と社会進化論-夏目漱石のアレクザンター・ポープ論における分裂と可能性-, 比較文学, 48, pp. 14-16, 2006.